

Ⅶ 御笠川東岸における須恵器の 編 年 に つ い て (Fig. 2)

近年、須恵器窯跡の調査は増加しつつあり、その資料も多くなっているが、まだ充分とは言えないのが現状である。筑前地方においては1970年大野城市上大利所在「野添・大浦窯跡群」^(註1)の調査報告書が刊行され、筑前地方における須恵器ⅢA、ⅢB、Ⅳ、Ⅴ期の編年表が作成され、須恵器研究の礎石が築かれた。その後、大野城市牛頸平田所在、「筑前平田窯跡」^(註2)の調査報告がなされ、Ⅲ期—Ⅵ期の須恵器窯跡である事が報告されている。さらに太宰府町向佐野所在の「向佐野、長浦窯跡の調査」^(註3)では、Ⅵa期（長浦窯跡）と歴史時代Ⅱ期（向佐野1号窯跡）の須恵器の資料を得ている。

以上の窯跡の資料は筑前地方のなかでも御笠川を挟んだ西岸に位置している。ここでは御笠川東岸地域に所在する古墳、窯跡、住居跡から資料を抽出して、須恵器編年を試みた。もとより、窯跡出土の資料が最も精度の高いものであるが、古墳出土品でも最終埋葬時の一括品や、住居跡内の一括出土品は純粋度の高いものとして併用する事にした。ここではⅠ期からⅥ期までの資料を得ることができた。以下、各時期の須恵器の特徴を述べる事にする。

Ⅰ A 期

中・寺尾遺跡^(註4)2号住居跡内出土品と成屋形遺跡出土品の大半がこれに相当する。器種は杯蓋、杯身、有蓋高杯、無蓋高杯、甕、甕がある。杯蓋は口径12.3cm、器高3.9cmである。天井部は $\frac{4}{5}$ をヘラ削りし、平らにつくっている。天井部と口縁部の境は突出しており、鋭い稜がつく。口縁部はほぼ直に近いため、稜線部径が口径を上まわる。口縁端部内面は斜めの平坦面を有する。杯身は口径10.5cm、蓋受け部径12.6cm、器高4.2cm、立上りは1.5cmである。立上りはやや内傾し、中程から立つ。口縁端部は平坦であり、水平よりもわずかに傾く。蓋受けは水平であり、端部はとがる。ヘラ削りは底部の $\frac{4}{5}$ に及び、平らにつくられている。以上の様に杯蓋、杯身ともに口縁端部は平坦面をもち、底部、天井部は平らである。口径に比して器高が低く、断面は箱形を呈する。有蓋高杯は杯部では立上りは2.0cmと長く、やや内傾する。口縁端部は平坦であり、わずかにくぼむ。底部はヘラ削りのあとカキ目を施している。杯身に比して口径は変わらないが、器高が増している。脚部では脚端部を上下に突出させるものと、丸くおさめるものがある。透しは長方形透しが3方にあくものと4方にあくものところがある。甕は頸部は外彎し、口縁部との境は鋭い凸帯を有する。口縁端部は丸くおさめている。頸部には櫛状器具による波状文が入る。埴部はこの時期のものとして底部はやや尖り気味となると思われるが現存しない。肩は張るが角張らずに丸味をもっており、この部分に円孔が入る。埴部にはカキ目、波

状文などの装飾は入らない。底部周辺はヘラ削り後に横ナデを施す。この時期の甕は口頸部は大きくなくて、埴部最大径よりも小さく、器高と最大径とはほぼ等しい数値になるものと思われる。無蓋高杯は杯部のみであり杯底部と脚部を欠損する。体部には2ヵ所に沈線を入れる事によって生じた凸帯があり、この間に楕描波状文が入る。陶邑古窯跡群Iの調査報告によると、TK 208型式から無蓋高杯につまみを付設する事が慣例化されておりI期末に消失すると云う事であるので、この土器にもつまみがつくものと思われる。なおTK 208内ではこの土器と非常に良く似たもので、これよりもひとまわり大形品には特例であるとして、底部近くにつまみを2個有するものがあるので、この土器についても1個または2個のつまみがついたものと考えられる。甕の口頸部は外反度が著しく、口縁端部上面はあまり角張らない。頸部には2ヵ所に鋭い三角突帯がつき、この間に楕状器具による波状文が入って装飾を添える。器表の外表面は平行叩き目が残っているが、内面は同心円叩き目をナデで消している。この時期では内面の叩き目を消す手法は一般的なものであったと思われる。横爰かと思われる小片が出土しており、今までは古墳などからの出土例もなかったのでその出現の時期が不明であったが、I期から現われていた可能性が強い。

I B 期

成屋形遺跡の出土品である。杯身は口径10.5cm、器高4.6cm、器高4.6cm、立上り1.8cmでありI期Aの杯身とはほぼ同大である。立上りはやや内傾し、口縁端部内面は段をもつ。蓋受けは水平であり、1条の沈線を配する。ヘラ削りは底部全体の%に及び、やや丸味を有する。

この時期のものは大半はTK 208型式に属しており、杯身の1個体だけTK23型式に属する。田辺昭三氏によるとTK 208型式以前には2型式あって、陶邑での須恵器生産の開始は5世紀前半であるという。また、5世紀前半～5世紀後葉までの4、50年間は陶邑のみで生産されており、他の地域ではまだ生産されていない時期である。従ってこの土器は、陶邑の地から持ち込まれたものである事になる。5世紀末になると陶邑以外の地でも須恵器が生産されるようになり、その地域は、摂津、近江、尾張、伊勢、遠江、出雲、能登の7ヵ所があり、このほかに九州と吉備が加わる可能性があるとの事である。九州において将来発見される可能性は充分にある。

II 期

Fig. ①のAにあたる。裏ノ田住居跡出土須恵器がこれに相当する。杯は口径12.5cm～13.5cm、器高4.7cm～5.1cmであり、大形品である。天井部と口縁部の境は段がつく。口縁端部内面は段を有するものと平坦で斜めに切られるものの両者がある。天井部は広範囲にヘラ削りを施しており丸味を帯びるものとやや平坦なものがある。杯身は立上りは1.2cm～1.7cmと数値には幅があり、基部から直線的に内傾するものと、内傾しつつも途中から立つものがある。口縁部内面は段を有するものと、内方へ傾斜する平坦面をもつものがある。この平坦部には浅い

沈線が入る。立ち上りは総じて太くしっかりしており、立上り基部と内傾斜との境も器壁が厚い。杯身の立ち上りからみて直線的に内傾する形態の方が途中から立つものよりも先行する可能性がある。内面底部には叩き目が残存しており、ナデて消そうとしているものもある。底部は広範囲にへう削りしている。高杯は短脚一段透しのものがあるが、長脚二段透しのものは出ていない。杯部、脚部にはカキ目、波状文などの装飾は入らず簡素である。陶邑では長脚一段透し高杯が出現する時期にあたるが、ここでは資料が乏しいため、明らかでない。野添・大浦窯跡群の調査報告の中でとりあげられているようにⅡ期後半に比定される日拝塚古墳からは長脚二段透し^(註6)が出土しており、この時期には、高杯の長脚化と共に一段透しから二段透しへの移行が行われた。

Ⅲ A 期

Fig. ①のB, Cに相当する。杯蓋、杯身については裏ノ田遺跡の遺物の項で述べているのでここでは簡単にのべる。杯蓋ではB型式は天井部と口縁部の境には明瞭な沈線が入り、口縁端部内面にも沈線状の段を有する。口縁部は古式の名残りで直に近いものと丸味をもって、よりⅢB期に近いものとがある。口径は12.5cm前後である。同時期の野添6号窯は口径13~14.5cmであり、やや大形である。杯身は立上りは1.6cm以上あり、基部から直線的に内傾する。端部は段をなせずに丸味をもつ。「野添・大浦窯跡」ではこの時期のものは、立上り端部に段をなすものと丸くつくられるものとの両者があるが、ここでは後者のみである。C型式はB型式と大差はないが、天井部と口縁部の境には甘い沈線が入るものと凹彎するものとの二者があるが、口縁端部内面は両者とも沈線が入る。天井部は頂部が凹彎するものや丸味をもつもの、平坦に近いものなど各種であり、変化に富む。器形はB型式より、若干大きい。杯身は立上りはB型式より短く1.3cm~1.5cmであり、端部は丸い。口径は12.5cm~13.1cmであり、例外として15cmがある。立上りと内傾斜面との境はB, Cともに稜がつかない。杯蓋に関して言えば、「立山山窯跡」^(註7)では同時期のものは、古式の特徴である天井部と口縁部の境に段を有するものと沈線を有するものの両者があり、「野添・大浦窯跡」も段を有するものと沈線のものとがある。段を有するものの方が沈線の方よりも先行すると思われるが、御笠川を挟んで対岸の裏ノ田遺跡では、杯蓋の特徴として明瞭な沈線が入るものとやや沈線が甘くなるものとの二種である。B, C型式ともに小田氏のいうⅢ期前半に属するものと思われるが、B型式がC型式よりもより古式の特徴を残している。他の器種については資料に恵まれないため不明である。

Ⅲ B 期

Fig. ①のD型式がこれに相当する。天井部と口縁部の境には段、沈線を有せずに丸くなる。口縁部外面の形態はバラエティに富むが端部はいずれも丸くつくられている。例外的に口縁端部内面に沈線の入るものがあるが、肩部は沈線を配さずに丸く、わずかに古式の特徴をとどめるだけである。口径は13cm~14cmでありⅢ期前半に比して大きくなるが、器高は変化な

い。杯身は立上りは 1.0cm ~ 1.3cm と短く内傾する。端部は丸くつくられており、段もしくは沈線は入らない。立上りの形態は断面三角形を呈するものと丸味をもって立つものなど多様である。高杯は有蓋高杯と無蓋高杯があり、高杯の小形化が行なわれている。八女の塚ノ谷各窯跡^(註8)では小形高杯は出現しているが「野添・大浦窯跡」では小形高杯はまだ出現しておらずⅣ期にならないと小形化されないと報告されており、川を挟んだ西と東でも地域差が現われている。有蓋高杯の杯部は杯身と大差ない。埴、直口壺、長頸壺、有蓋脚付壺がある。提瓶がこの時期にみられており、背面はすでに平坦面を有している。このことから、ⅢA期には背面にやや丸味をもつ提瓶が出現した事は充分に考えられる。小形の提瓶も同時に出土しており、ともに口唇部は丸くつくられており、突帯を配さない。

Ⅳ 期

Fig. ①のE型式がこれに相当する。杯蓋には口径 13cm 前後のものと、口径 11cm 前後のものがあ、A、B類に2分類される。杯身も杯蓋に対応して二通りの大きさがある。立上りはA、B類ともに 5mm ~ 10mm である。天井部、底部はともに平坦面をなしており、調整法は、狭い範囲を粗いへう削りするか、未調整である。一般にこの時期において身と蓋の逆転があらわれるとされているが、ここでは、土器の出土状態から、これを証明し得る資料は得られなかった。図示した蓋に身受けのかえりを有するものは器高が低いことと、身受けのかえりの形態から蓋とし、蓋受けのかえりをもたない身とセット的にとりあつかう事ができよう。高杯は有蓋高杯と無蓋高杯があり、ともに小形化している。前述した如く高杯の小形化はすでにⅢB期に出現しているが細部をみると脚部に比して杯部の口径が大きくなる。甕は頸基部の幅を減じており、頸部と口縁部の境には、沈線が残る。埴は小形化しており、底部は平坦に近くなる。底部の調整法は未調整であり、杯とともに粗雑化が目立つ。平瓶がこの時期に見られるが、ⅢB期にはすでに出現していたものと思われる。特殊な土器としては、古墳出土の新羅土器がある。落とし蓋となるものであり、いつ頃我が国に持ち込まれたかその時期を知る上でも好資料である。

V 期

杯蓋では乳頭状のつまみと頂部をおさえた釦状のつまみがつく。身受けのかえりは身受け端面よりも外方へ突き出す。杯身は蓋受けのかえりをもたない。直口もしくはやや外反気味の口縁で、平底に近い形となる。底部の調整は未調整が大半をしめており、わずかにナデだけを施すものがある。Ⅳ期においてはへう削りと未調整のものと両者が行なわれていたが、Ⅴ期ではすべてへう削りを行なわない。小形品と大形品の二通りがある。埴の大きさは二種あるがいづれも平底である。底部の調整法は未調整のものと、狭い範囲に粗いへう削りを施すものがある。平瓶は非常に小形品であるが、同時に中形品も行なわれていたと思われる。小形甕は口頸部は短く、口唇部には突帯などの装飾は入らない。新羅土器の台付長頸壺が出土しており、

その時期決定にとって好資料となろう。

VI A 期

杯蓋は身受けの短いかえりがつくが、口縁部を折り返した形状のものは相伴していない。杯身の底部には長目の高台が付いており、体部、口縁部はやや外彎気味にのびる。杯身、杯蓋とも大形化する。高杯は非常に小形となり、脚部に比して杯部は大きい。平瓶はやや肩が脹るようになってくるが、まだこの部分には稜はつかない。次の段階には肩が脹って稜のつく形態が考えられる。

最後に各型式の年代を求めて見る事にする。I期とした土器のうち端部が平坦面をもつ杯蓋・杯身・有蓋高杯・無蓋高杯・甕は、TK 208型式に属しており、この中では最も古式のものである。口縁端部内面に段を有する杯身は、底部もやや扁平さを失っており、TK 208型式よりは後出するTK 23型式^(註9)に属すると思われる。従って、実年代はTK 208型式は5世紀後半、TK 23は5世紀終末に比定される。II期とした土器はMT15型式^(註10)に属しており、6世紀前半に比定される。陶邑との対比で見れば小田富士雄氏の言う第II期はTK 47型式^(註11)とMT15型式が該当し、編年表の土器はII期でも新しい方に位置づけられる。前述した如く、5世紀末は地方でも須恵器が焼成された時期であるので、ここにとりあげた土器の窯跡が周辺部に存在する可能性は大である。III A期は6世紀中葉に、III B期は6世紀後半、IV期は6世紀末に比定される^(註12)。V期の年代を求める前にIV期について述べる。IV期としたものは小田氏のIV A期のものだけであり、大宰府都府楼跡^(註13)の調査結果では杯蓋で身受けのかえりをもつものと、かえりは消失して口縁端部を折りまげるだけのものが相伴しており、7世紀中葉に比定されている。ここでは口縁端部を折りまげる器形のものは伴出せずに身受けのかえりをもつものだけであるため、大宰府出土のものよりも若干先行するものであり、7世紀中葉以前、即ち、7世紀前半代に比定される。さてV期の年代であるが、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告I」^(註14)によるとV期に該当するものは同報告書の杯D類であり、7世紀前半期に比定されている。従ってV期の年代はVI期よりもあまり隔らないものと思われ、7世紀初頭から前半代にかけての時期と考えたい。

- 註 1) 小田富士雄・柳田康雄『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財報告書第43集, 1970.
 2) 坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣, 1974.
 3) 亀井明德・高橋 章「向佐野・長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI』1975.
 4) 『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書 I, 1977.
 5) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ, 1966.
 6) 『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯』福岡県教育委員会, 1930.
 7) 小田富士雄『立山山窯跡群』八女古窯跡群調査報告IV, 1972.
 8) 小田富士雄『塚ノ谷窯跡群』八女古窯跡群調査報告I, 1969.
 9) 註5) に同じ
 10) 註5) に同じ

- 11) 註5) に同じ
- 12) 註7) に同じ
- 13) 『大宰府史跡』九州歴史資料館, 1976.
- 14) 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I』奈良国立文化財研究所学報, 第27冊, 1976.

Tab.16 福岡県における窯跡とその年代

	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ	Ⅵ		Ⅶ
	A	B	A	B				
筑後地方 (八女市 八女窯跡群)	中尾谷 1～4号窯	塚ノ谷 3・4号窯			塚ノ谷 1号窯	塚ノ谷 2号窯	牛焼谷窯	
							管ノ谷2号窯 管ノ谷1号窯	
筑前地方 (大野城市を中心とした牛頭 窯跡群)	野添 6号窯	野添 9号窯	大浦 1号窯	大浦 2号窯	三助山窯 (採集)	はすわ窯 (採集)		野添 4・5号窯
		平田窯 A 地点		平田窯 B 地点				
		雄ヶ尾窯			長浦窯			
		裏ノ田 1・2号窯						
豊前地方 (遠賀川流域) 宗像地方)			向野窯 小道窯 天観寺山窯	宇土窯			ドギバ窯	
			丸ヶ谷窯				榎ノ粉池窯跡群	
		古門窯		夏井ヶ浜窯 (採集)				
	井手が浦窯 B	井手が浦窯 A			宗像郡須恵 (採集)			